

母儀仙院后彰子一條巡禮住吉靈社關白藤原賴通左相府弟教通以下卿士大夫之祇候者濟々焉或棹花船而取水路或脂金車而備陸行蓋四海之无查展多年之舊思也于時秋之暮矣日漸斜焉向難波兮忘歸舊風留頌過長柄兮催興古橋傳名遂仗酣醉各發詠歌其詞云中略

關白殿

君が代はながらのはしのはじめより神さびにけるすみよしの松中略

辨のめのと

橋ばしらのこらざりせばつのくにのえらすながらやすぎはてなまし

〔後拾遺和歌集十八〕長柄橋にてよみ侍ける

前大納言公任

橋ばしらなからましかばながれての名をこそきかめあとをみましや

〔和泉式部集四〕ながらのはしを見て

ありけりとはしはみれどもかひぞなき船ながらにてわたるとおもへば

〔百練抄五〕延久五年二月廿日太上皇三陽明門院后朱雀后一品内親正子參石清水住吉

天王寺給廿二日覽難波浦廿五日覽長柄橋於御船有和歌廿七日還御

〔榮花物語三十八〕二月延久五年はつか天王寺に詣させ給この院をば一院とぞ人々申ける後三

條院とも申めり女院后朱雀后一品宮子もまうでさせ給中略廿二日のたつときばか

りに御船いだしてくだらせ給ふ程に江口のおそびふたふねばかりまいり祿などをぞたまは

せける中略こはいづくぞとはせ給東宮大夫ぞつたへとひ給これはながらとなん申すと

いふ程にそのはしはありやとたづねさせ給へば候よし申す御ふねとめて御らんすればふ

るき橋の柱たゞ一のこれりいまはわが身をといひたるはむかしもかくふりてありけると思

もあはれなり中略廿五日の辰時ばかりにぞ御船いだす中略實政を御ふねにめしあげて歌ど